

地球 第十六卷 第二號

昭和六年八月

司馬遷の見た古代支那の人文地理について (一)

藤 田 元 春

司馬遷は云ふ迄もなく史記を編纂した支那一流の史家である。其系圖を按ずれば祖先は顓頊の世に司地の官であつた黎氏である、家學として地理に親むこと既に幾千年であつた。周の世に程國伯に封ぜられたが、宣王(西紀前八世紀)の時から司馬氏と改姓。周が衰へたので晋(五霸の一)にゆき、やがて秦にうつした。この間に司馬氏は多くは諸國に分散し、其の中には衛や、趙や、秦に仕へて名を爲したものがゐる。漢代になつて司馬談といふ人が武帝に仕へて太史公になつた、この人が遷の父である。學者で多くの史料を蒐集した。遷は父の志をついで太史公となつたが李陵の禍にあつて、刑罰をうけたので、大に發憤して、史記を編した、凡百三十篇。上は黃帝より下は武帝に至る二千有餘年の古代史を、細大もらさず、しかも必要な記録と不信用な記録とを嚴正に批判して最も信ずべ正史にしたのであるから、決して凡庸の徒の及ぶべき事業ではなかつた。周公歿し五百歳にして孔子あり、孔子歿して五百歳、春秋の義を明にするのは今だといふのが抱負であるから、

其自信の程も思ひやられる。いかにも後世紀傳體の模範となり、隋志、經籍志は始めてこの修史の方法を以て正史であると定めた。紀傳體とは本紀と列傳をその大綱とし、これに書又は志又は表を加へたものである。

但し司馬遷が自ら周公の禮を制し、孔子の春秋を正したのに繼ぐといふ以上は、儒家の理想を顯彰すべきであるにも拘はらず、道家を重んじ神仙を談じ其歴史觀は儒學的純一でないといつて其態度を批難するものがあるけれども、それは司馬遷の學者的度量の大きさを知らないものであつて、事實は遷の史觀の方が包容が大きいのである。正史としてはこの不偏不黨の公正な見地で書かれてこそ、始めて價値が高いのであるから、批難する方がわるいのである、韓愈や柳宗元など口を極めて其の文章の妙を讚美してから、其記事よりもむしろ文章藝術の模範として世に重んぜらるゝに至つたことも大きい。延喜式にも三史と文選とは各大經に準ずとあつて、四書五經について、史記や漢書や後漢書は我國の紀傳道の學者に重んぜられたのであるから、やがて日本の修史に影響する所が多かつた。水戸光圀の大日本史の如きやはり範を史記にとつたのである。

従つて徳川時代になつても、史記の注解文や評林をつくつた人が多く、史記は殆ど日本の古學と思はれる程に親まれた書籍である。其記事によつて發憤興起した人傑はいくらあつたか、はかることが出来ない。さうした古書について今更事新らしく、その述ぶる所の人文地理はどうか？などといふべきではないかもしれぬが、しかし今の世の人はかうした古い漢學の中に、新しい人文地理などいふものはないであらうと考へて、一顧だも與へない人が多いことと想像するが故に、敢て淺學

を顧みずして、この一篇をかゝげたのである。

東洋に於て發達した上代の史書には、餘程早くから地理的記載がある。又治亂興亡を論ずるにあつて之を地氣の然らしむると考ふる人も亦甚だ多かつた。就中管子や孟子のごとき其尤も大なるものである。司馬遷も亦、實に上下二千年の歴史の基礎にひそむ所の地理を重視することゝ於て、決して古人に劣らなかつたのみではなく、明に紀傳道の一派を開拓して後世永く正史の祖となつたのである。

我等はかうした偉人が、いかに地人相關の理法を重要視したかを學んで、はじめて東洋の地理學を理解しうると考へるのである。

二

司馬遷は、其自序に明にのべたやうに、其家學として太史の官にゐたから、其學古今を兼ねた。故に戰國時代に發達した陰陽家、儒家、墨家、名家、道家といふもの、論ずる所はすべて通曉せざるはなく、一々その特色と缺點をあげて正鵠を得てゐる。たとへば陰陽家のとく所は、四時の大順である、至理である、何人といへども之に背くことは出來ない。しかし四時の序に順へば必ず昌へ之に逆ふものは必ず亡びると説くけれども、その事實は必しも然らずであるといふ釘を打ちむといふ鹽梅である。儒家は禮を重んじ五倫五常の道をとく、これも實に至理であつて君臣、父子、兄弟、朋友のないものはない。しかしその説くところの經傳の研究といふやつは容易でない。二三代かゝつても、之に通曉が出來ぬ場合がある。故に儒學といふものは勞して効が少いものだとい喝す

る。まづかういふ風に諸子百家の説を、小口おしに批判したのをみても、全く近世史學者の所謂客觀的純正批判的態度といふものを其根柢に支持してゐることがわかる。蓋し司馬遷は世界に於ても稀にあらはれた一偉才であつたのである。

どうしてかやうに諸子百家に通じて、その長短を知ることが出来たかといふに、勿論司馬遷の頭腦がよく、常識の發達した先天的の結果であつたであらうとは思ふが、しかし予は彼の足跡天下に普くして、よく地理について實際を見聞した結果、かういふ風の見識が出来たことであらうと想定する。換言すれば司馬遷の學問の基礎に地理學があつた！ まづかういふことを特に主張したいと思ふのである。

遷の生れたところは龍門である、黄河の北岸である。そこに耕牧してゐたが、十歳にして古文尙書を學び、二十歳にして、南は江淮に遊び、會稽に上り、九疑(湖南の南)を窺き、沅湘に浮び、北は汶泗を涉つて業を齊魯の都に講じ、孔子の遺風を觀、邶、蒹、彭城に冠困し、梁楚を過ぎてかへると記してゐる、(自序傳)猶又河渠書には自ら左の如くのべた。

余南登廬山、觀禹疏九江、遂至于會稽太濕、上姑蘇望五湖、東闕洛淮、大邳、迎河、行淮、泗、濟、

溧、洛、渠、西瞻蜀之岷山及離碓、北自龍門、至于朔方。

とあるから彼の足跡は北は黄河の大屈曲をする今の包頭邊から、南は江西の廬山に達し姑蘇城即蘇州から杭州太湖に達し、湖南省は九疑山といつて衡山よりも猶南にすゝみ、西は四川省の岷山から涪江及成都をさぐり、東は齊魯の舊い都會を尋ね、河と濟と溧と淮との平原を縱横に横斷してゐる

のである。之を文字通りに解釋すれば、十八省の地足跡印せざるはない。至る所で史蹟をさぐり資料を得た。傳説の疑ふべきものは、すべて之を正すことが出来たのは、實にこの旅行の賜である。恰もランケが伊太利に旅行して資料を得たので、はじめて彼の世界史が正當に客觀的に編著されたのと全く符節を合する。

支那の後世の史家には、すこしも歩かないで、門戸を閉して、さうして机上で文を作るものが多い、従つて之を實地にあたると誤謬が多い。けれども實地を探ぐるといふことは中々容易なことではない、簡單な一例をあぐれば、

我明治維新史の一節であるが井野邊茂雄氏の幕末史概説をみると安政元年十月十八日露使プーチヤチンの下田入港といふ記事がある、所が十一月四日大海嘯があつて其搭乘してゐたヂャーナ號が大破した、それから戸田^{ヘタ}で之を修理することになつて回航したのであるが、井野邊氏の本は、戸田へゆく途中で暴風に遇ひ、遂に駿州小濱沖に、沈没したとのべてあるが、同じ記事を、吉田東伍氏の大日本地名辭典には、十二月朔日戸田に向ひ、其翌日再び暴風にあつて宮島沖に沈没としるしてある。

この戸田の事件は有名なことであるが、それが兩書かくのごとき差違がある、せめて地名が一致すればよいが、一は小濱沖、一は宮島沖とある。開國起原を讀むと小須濱より二里程洋中に寄候處にて風波起り江之浦へ吹付けられ藤川の落口宮島村に立戻候とあるから、宮島沖が正しいのである。

まづかうしたもので、歴史家は机上でやつてしまうものである。一々實地につかない。そこで明治維新前後のことでまへ。再査をやらねばならぬといふものである。これが修史の大事業であり史家の注意を要する苦勞なのである。

ランケが伊太利に行つて、はじめて正しいありのまゝの歴史がかけたやうに、司馬遷も天下を周遊したので、信ずる所が篤かつた、果して彼の正史は萬代修史の模範となつたのである。

司馬遷の修史上の偉觀は年表を設けた外に入書のうちに河渠、平準の二書を編して交通や經濟現象を重要視したのみでなく、列傳の中に貨殖とか遊俠とか、日者とか、龜策とかいふ傳を設けて市

井の徒でさへ、之を正史の中に記述し、併せて俗間の迷信といふやうなものでも、其人心を動かすことの大なるものは、之を編述したといふ注意を忘れてゐない。

本紀や世家、又は列傳の中に達意の文章で郡邑山川の形勢を時に應じて編述する所は堂に入つたものであるが、西南夷、東越、南越、朝鮮、匈奴等の外國の地理も亦忠實に記述してゐる、自ら史記一卷によつて當時の時代がわかるのである。

三

予は右にのべた數書によつて、司馬遷の人文地理學の見解を左に列記開陳してみたい。

第一、河渠書 第一に河渠書といふものがある、彼は天下を周遊して、水運のいかに經濟生活に重要なるかを痛感したと見え、禹の治水の傳説をかゝげ、黄河の溢るゝを以て中國の害であるとのべ、禹貢の河道を明にした。さうして漢初にあつた通運の渠水は、第一は鴻溝といふ。即後世の汴水といふもの、隋代に大運河となるもの、前身の存在を明にし、鴻溝によつて河を江と淮とにつらね、南は吳に達し(蘇州)西は江水を溯つて雲夢の大澤(今の洞庭湖)に達することをのべた。現在でも黄河の大平原には黄河や淮水の支流があつて、平野の中に帆をあげて上流に通ずるものがあるがさうした水運の利用の遠いことをのべてゐる。

彼は齊に於て濟水と淄水との交通をのべ、(今日の大清河と小清河に似たもの)四川省では蜀守李冰が灌縣で水を分つて成都の盆地に灌漑したこと(彼の所謂離碓の地)を見、轉じて陝西盆地では同じく秦の代に鄭國渠をつくつて、四萬餘頃の美田を得たゝめに、其富が諸候に覇たらしめたとのべ

てゐる。

たゞし漢武の元光年中(紀元前一三二)に、河が瓠子に決裂して十六郡を大洪水にしたことについては、特に悲しみの意を表し、司馬遷自ら武帝に従つて、其堤防の土砂を運ぶに御供をしたとてゐる。

第二、漢民族の文化圏内 司馬遷は天下を周遊して文化の最も盛んであつた故郷と、新しく開けた其周邊の地との人文現象の差異について、すぐれた見解を呈示してゐる。封禪書の中に於て、

昔三代之君皆在河洛之間、故嵩高爲中岳、而四岳各如其方。四瀆咸在山東。至秦稱帝、都咸陽、則五岳四瀆皆并在東方。

とのべた、これ實に司馬遷の親睹した斷案であつて上代の文明は河洛之間に起つた、即黃河平原である。そこは五岳が之を限るとし、四瀆がそこに流れたとするのである。

五岳四瀆については古來種々の説があるが、周代になると洛陽に都したから、河南省の嵩山を中とし西は華山、これは黃河が山西陝西の間を流れて潼關につきあたると、その屈曲地の南にある秦嶺山塊の主峰で、長安よりも東にある。これは周代に長安は猶中華の民の居る所でなく、文化の低い遊牧地であつたことを立證するものである。東は泰山であり北は恒山である、これは河北の平野の西に聳ゆる西山山塊の主峰である。南は霍山、これは淮水と江水との分れであつて、河南省の南の山である。爾雅の釋丘には別に湖南の衡山を擧げるけれども、それは事實上河洛の平地の限界ではない。河洛の平地から四望する所によれば、南岳は霍山でなければならぬ。故に爾雅にこの霍山

の一説があるのである。

周以前の殷の頃は五岳でなくて四岳であつた。爾雅の釋地篇九府に、中有岱岳とあつて、泰山が天下の中央であるといひ、そこは天孫氏であるといふ傳説さへあつた。さうして泰山の封禪は最も古くからあつたので、其儀式も重んじられ、管仲も亦古者封泰山禪梁父（泰山の麓の小丘）者七十二家といつて、古來之を祭つたことの盛であることをのべた、現に泰山の麓には泰安府があり、泰山廟があつて、天下第一の名山である。（拙著西湖より包頭まで參照）

同じく爾雅の四極篇には齊を以て中也と注してある。齊は臍といふ同意語で、天下の中心といふ意味の名である。それこれを併せ考へると支那の文化は泰山の西の黄河のデルタに起つた、自から三代の古都がその間にある。しかし秦が都を長安にうつして、古への文化圏は西にのびて天下の形勢がかはつた、故に五岳、四瀆皆東方に在りと喝破してゐるのである。四瀆とはその泰山の西の平野の河であつて、黄河、濟水、淮水及揚子江である、江淮といつて淮水は江に通じ、河濟といつて河水と濟水とは相通じ、その間に淮泗が連絡するといふのが中原である。これは孟子の滕文公章句にも出てゐる語で、

當堯之時、天下猶未平、洪水橫流、汜濫於天下、草木暢茂、禽獸繁殖、中略獸蹄鳥迹之道交於中國、堯獨憂之、舉舜而敷治焉、舜使益掌火、益烈山澤而焚之、禽獸逃匿、禹疏九河、濬濟、潔而注諸海、決汝漢、排淮泗、而注之江、然後中國可得而食也。

とある。故に孟子の中國は、實にこの河、濟、江、淮の間である。汝水は河南省に流る、淮水の支流であ

り。漢水は湖北の河で漢口に至つて江に合するものである。

但し司馬遷の當時になると、中國の領土は廣くなつてゐて、古への五岳では、其居住圏内を包むことが出来かねたから、嵩山、恒山、泰山、會稽山、（浙江、紹興府）湘山（湖南省衡山）の五つを名山とし、大川としては濟と淮とをあげてそこに大川祠があるとのべてある、前代の地理的事實を記したのみでなく別に華山から西に、華山、襄山、岳山、岐山、吳岳、鴻冢、瀆山、（蜀の山）の七つを以て新に名山であるとき、河水の外に、漢水と、湫水と江水とを祠るとしてゐる。これは古への中國から離れて太行山や伏牛山塊以西の高原に於ける土地の山川を祠る意味である。けれども、勿論周以前の五岳と比較すべき、名山ではないから、今日に至つて其の跡が明にしられないのが多いのである。

故に司馬遷は貨殖傳の中に於て、

昔唐人都河東、殷、都河内、周、都河南、夫三河、在天下之中、若鼎足。

とのべた。これは封禪書の昔三代之君皆河洛之間にありといつた文字に照應するものであつて、至言である。唐人即堯の故都が司馬氏の意見では河東にあつたのである。蓋し黄河の河道は、今の包頭から山西と陝西との間を南下し、潼關から、ゴーチを開いて東折するが、懷慶府からさきはデルタであるから。一線東流するものを濟水といひ、も一つ東北流して渤海に入るものを漯水（今の大小兩清河に近い）といひ、河の本流は太行山に従つて、北方へ流れ河北省の低地に出た。之を河水といつたことは詩經に明である。故に當時の黄河本流はU字形になつて山西臺地を包むだ形であつ

た、そこでこの山西臺地と其東斜面黄河の包むだ土地を河内といひ、陝西の方は西河といひ、河の東の方、泰山までの間は河東といふ語で指示したのである。

支那の學者は堯の都を山西の晋陽であるとし、舜の都は同じく山西で黄河と涑水の會する附近の蒲州(今永濟)であると論ずるものがあつて、支那通史の著者那珂博士の如きもこれに従つてゐられる。けれども司馬遷は、明にその説に従はないで、貨殖傳の中に於ても、

昔堯作遊成陽^フ舜漁於雷澤^ニ湯止干亳^ニ

と斷言した。堯の邑は成陽即今山東省定陶縣である、堯を陶唐氏といふのは陶にゐたからである、舜は傳説によれば河濱に陶し、雷澤に漁り、歷山に耕したといふ、河濱の陶といへば右の定陶であり雷澤は古來支那の學者が雷夏澤だといひ山東省定陶縣の湖水であり、歷山といふのは、今の濟南の南の歷山である。即堯や舜の居たところは黄河の東で濟水の沿岸であつた、そこで陶器をつくつてゐた民族の首長であつて、支那の石器時代の酋長と考ふべき人である。支那の文明は陶器から青銅器時代にうつるので、現在でも鼎といふ銅器に似たもの、否その原型に近い鬲が蒙古や滿洲から出土し、我國では秋田縣からも出土したが、先年遼東半島の魏子窩からは濱田博士が甗と稱する周代の銅器に似た土器(鼎形土器)の多數を發掘されたことによつて、堯や舜の時代からの陶唐氏などいふ人々の作成した日用の器具の形式までも理解されるやうになつてゐる、それが、やがて殷の時代の文化になり、その中心は、西に移つて河内に都したのである。

黄河が大行山脈に沿ひ北へ曲る所の内側である。即今の衛輝府は殷の紂王の朝歌であるといはれ

先年來八ヶ間敷い殷墟は、河南省彰德府の附近にある。故に河内の都は間違がない。そこから多數の龜骨に記された卜辭が出た。その古文字は羅振玉氏や王國維氏に讀まれて、殷の石器時代の文化が明になり、その卜辭の地名によつて、殷の王が或は南方の蠻族をうちに出征したことや、鬼方といつて陝西省に居た遊牧民を征したことがわかる(觀堂集林參照)王國維氏は鬼方は陝西の岐山の附近であるといはれるのであるが、さうした岐山の麓、渭水の上流は、實に周の始祖古公亶父の故郷である。後には秦の祖先の居住地でよく牛馬を育てたので穆王に千里の馬を獻じ、初めて名を表はしたといはれる土地である。

山西臺地にも、古くから戎狄がゐたし、陝西にも犬戎や鬼方の民がゐた。いづれも支那中原の文化から遠く離れたものである。又南方の湖北省の荆楚といふ地方の如き、戰國頃にやうやく漢民族に歸順するのである。勿論江淮の下流、吳や越は文身斷髮の野蠻であつたことは周の歴史の告ぐる所である。従つて中國の文化圏は河東、河内、河南の三中心にあつた、換言すれば河濟漯淮の交通の中心地、今の山東省定陶附近に發祥し、亳といふ所(河南の歸德府附近)に居た殷の湯王に至つて、はじめて四方に號令し。徐々に東夷、北狄、西戎、南蠻を同化したものである。そこで周の世にはこれらの夷狄戎蠻が、やがて支那の文化民となるのであつた。故に孟子も離婁章句下、

舜生於諸馮、遷於負夏、卒於鳴條、東夷之人也、文王生於岐周、卒於畢郢、西夷之人也

とのべてゐるので、東夷と、西戎の出身者が一は帝舜であり一は周の王室であるのであつた。

かうした事は黄河デルタに發生した文化圏の年をへて廓大したことを告ぐるものであるが、司馬

遷は天下を周遊して、目のあたり其形勢を熟知したので、このことを餘程明瞭に解説したのである。予はこの點に於て司馬遷の人文地理學的識見は既に堂に入つたものと考へてゐる。

第三、陝西盆地 右にのべたやうな次第で陝西盆地はその開拓がわかい、周代は大戎や驪戎といつた民族の野蠻境であつた、後これらの蠻民が支那の文化に感化をうけて、やがて農業の民となり、その粗朴な生活が段々と進歩し、禮儀ある生活に入つて遂に中國の民となるのである。その著しき變化の狀態は、かれらがやがて姓氏をもつやうになる事によつて證明される。王國維氏の研究によると、(觀堂集林第十三)かの鬼方の子孫は隗を姓とし、獯豸の子孫は允姓となり、いつの程にか、中華の民となつてゐる。故に王國維氏は曰く「鬼方禮俗中國と異なり、或は本より姓氏の制なし、中國に入るに逮びて諸夏と通じて婚す、因て國名を以て姓となす」である、又曰く「戎といひ狄といふも皆中國の語にして、外族の本名にあらず、戎は兵也、凡そ兵器を持つて侵盜する者は亦之を戎といふべし、狄は邊也、遠き也。遠きに居て當に之を驅除すべきもの亦之を狄といふべし。」と云べてゐる。

従つて周の起るは、殷からみれば兇暴な西戎から出てきて國を取つたのであるから、西夷である。しかし周は殷を亡ぼしたのち、その文化を繼承して、之を石器時代から青銅器の時代に進めたのみに止まらず、周禮を制定して燦然たる古代封建の平和郷をつくり上げたので、三河の地は恐らく當時世界で最も立派な文化地帯となつたのであつた。所が周の發祥した岐山の土地に近い所に於て嬴姓の一族があつて、周の爲めに牛馬を畜ふてゐたものがある。これが即後の秦である。それは周の

孝王の頃汧渭（渭水である）の間にあつて馬大に蕃息したとあるから、全く西戎であつて、遊牧の民である。その遊牧の強健な民族が今度は周の衰微に乗じて四方を征し遂に天下の覇者となるのである。漢は山東に起つて、秦の跡をつぎ、やはりこの陝西に入つて帝都を定めたのである。司馬遷はそこでこの陝西の地理を論じて、當時こゝがよろしかつた理由をのべた。曰く、周の西都であつた陝西の盆地長安附近は土地がよいけれども狭かつた。しかし秦をへて漢時には南方から四川の蜀の富が入るし、西北から隴西（甘肅）の交通が盛んになつた。一方汾水によつて山西の大原に通じ、山西臺地から北ずつと包頭附近、今の綏遠一帯の牧畜の富が集まる。さうしてこの北方の土地は、すべて遊牧民で、關中と同俗のものゝ居る所であると記した、曰く。

天水隴西北地、上郡、與關中同俗。然西有羗中之利、北有戎翟之蕃、畜牧爲天下饒。然地亦窮險、唯京師要其道。

と、といつて牧畜の利を集めて、しかも要害がよいところだと述べたのである。そこで牧畜地だから土地は黄河中央のやうに開拓が少い、しかも廣い面積であるのに人口は少い。おまけに中央集權の帝都がある。都には天下の富豪が集まる、茲に於てかその實力が天下の覇を握る所以であるとのべたのである。

故關中之地於天下三分之一、而人衆不過什三、然量其富什居其六

と、かうした數字をみると、いかにも司馬遷の統計學的智識の明であることがわかる。これでこそ秦始皇が六國を征して天下を一統した理由もわかり、漢武に至つて、東朝鮮を征し、北は匈奴を臣

従し、南は南海から安南(日南)に領土をひろげ、四川から西南夷を平げて、雲貴二省を併せ、さらに張騫を使はして西域との交通をひらき秦始皇の長城が隴右に止まつてゐたのを、ずつと西北にのばして、酒泉燉煌に至らしめ、玉門、陽關に達せしめた資力の所在がわかるのではないか。今日中央アジアで、漢代長城の廢墟からいろ／＼の古器物を發掘するの理由も、かうした當時の地理學的理を知ることによつて成程だと思はしめるのである。

【注】 司馬遷のかうした地理學的常識から考へると、中華民族が西方の中央アジアから東移したといふ學説はやゝ疑はしいものになるやうである。周といひ秦といひ、西方から來た遊牧民ではあるが、羌といふものや氐といつた土俗に近い。とても西域のトルキスタン(深目隆鼻のアーリヤン)とは全くちがつてゐて、漢以前にそれらとの交渉は全く存在しない。王國維氏といへども、其意味は鬼方を遠方であると解説してゐるにも拘はらず。

其地尙在岐關之西、今徵之古器物、則宣城李氏所藏小孟鼎、與維縣陳氏所藏梁伯戈皆有鬼方字、案大小兩孟鼎皆出陝、鳳、翔、府、郿、縣、禮村溝岸間、其地西北按岐山縣境、當孟之封地。

大孟鼎紀、「王遣孟」就國之事、在成王二十三祀、小孟鼎紀「孟伐鬼方」獻俘、受錫之事、在成王二十五祀、

とのべてゐる。云ふ所は郿縣禮村の溝岸から、青銅器の鼎が出土した、大小二つある、大の方は周成王二十三年に之を孟國に遣はしたといふ記録がある。即成王のときこの邊が一つの封建で野蠻人首長がゐて、之を賁つたのである。小の方は同じ成王の二十五年に孟が鬼方をうつて俘囚を獻じた

記念にこの鼎をもらつたといふ記録である。

日本でも蝦夷といふ遊牧民が奈良朝以後、何回となく征討されて、夷俘とか俘囚とかいふものが献上された。その民を播磨以下近畿に移した。それが或は藤原氏となり、阿部氏となり、佐伯氏などといふ姓を得て、いつのまにかヤマト民族に同化したのであるが、右の鼎の文をみると、代鬼方猷俘受錫とある。全く日本人がアイヌを同化した様子と同じく周人も働いたことが、この文により理會されるのである。

してみると周にしても秦にしても、其發祥地は鬼方で、我國ならばアイヌである。黃帝以來陝西岐山の地方に居住した羗氏の族であつたのである。故にその起源を更らに、西の方に延長して、中央アジャと考へるのはいかゞかと思ふ。

漢の太初曆はギリシヤの曆法でメトン・サイクルである。これも西の方から移つてきたのである。漢代文化の西方起源説をとく人もあるが、この説のごときも一應は吟味して之を受け入れねばならぬ。何もかも西域からきたといふ前に我等は史記を忠實に讀まなければならぬと考へる。

司馬遷は徹頭徹尾支那の文化圏は五岳四瀆の間にあると信じ周や秦の起つた陝西についてさへ右のごとく一步野蠻であることを認めてゐる、その野蠻が猶西の方で文化が高かつたとは一寸考へられない。この點我等は史記の説に従つて支那の文化は中原に獨立に發生したことを考へておく方に左祖する、西方文化を餘りに高くみてはならぬ。但し張騫の鑿空以後、中央アジャの文明が東流したことに對して敢てかれこれいふのではないから、この點讀者の誤解せざらんことを祈つておく。